

# 息長古墳群 3

—人塚山古墳発掘調査報告書—

2 0 0 3

滋 賀 県 坂 田 郡

近 江 町 教 育 委 員 会

## 序

近江町は、古代より近畿・東海・北陸を結ぶ交通の要衝とされ、滋賀県内においても、周知される埋蔵文化財包蔵地の多い町として知られています。

今般、報告をいたしますのは、滋賀県北東部に伸びる横山丘陵の南端部に位置する息長古墳群のうち、人塚山古墳の発掘調査成果です。息長古墳群は3世紀前半から6世紀後半までの期間に築造された地域の首長墓域です。なかでも人塚山古墳は、6世紀代に築かれた最後の前方後円墳と評価されてきました。

現在近江町では、国庫補助町内遺跡発掘調査事業によって、息長古墳群の性格を追求し、保存を講ずる資料収集を継続実施し、平成13年度には大手前大学史学研究所（兵庫県西宮市）の協力を得て、人塚山古墳の発掘調査を実施したところです。

大学機関と行政機関との学社融合によって、これまで以上に質の高い発掘調査が展開され、地域史のより詳細な復元が可能となりました。

この報告を通して、地域史の正しい理解が進み、埋蔵文化財保護への理解と認識を深めていただければ、幸いです。

末筆になりましたが、同事業にご協力いただきました関係諸氏・関係諸機関に熱くお礼申し上げます。

2003（平成15）年 3月

近江町教育委員会

教育長 戸田 隆三

# 例 言

1. 本書は、滋賀県坂田郡近江町顔戸平塚に所在する人塚山古墳の発掘調査成果である。
2. この調査は、平成13年度国庫補助事業埋蔵文化財（近江町内遺跡）発掘調査の中で実施された。事業経費および各補助金は、以下のとおりである。

	国庫補助金	県費補助金	町負担金	計
平成13年度	1,500,000円	750,000円	750,000円	3,000,000円

3. 人塚山古墳の発掘調査は、保存を講ずるための基礎資料を得ることを目的とした確認調査であり、近江町教育委員会が主体となり、大手前大学史学研究所に調査を依頼して実施した。なお伐採作業・発掘作業・埋め戻し作業については近江町生涯現役センターの協力を得た。
4. 調査体制は下記のとおりである。

調査主体	近江町教育委員会	教育長	戸田隆三（平成13年10月以降） 北川孫一（平成13年9月まで）
	大手前大学	史学研究所 所長	衣笠 茂
調査事務局		社会教育課長	北村惣一
		文化振興係 専門員	宮崎幹也
調査指導	大手前大学	人文科学部史学科 教授	秋山進午 教授 櫃本誠一
主任調査員	森下章司（大手前大学 人文科学部史学科講師） 藤本史子（大手前大学 人文科学部史学科非常勤講師） 魚津知克（大手前大学 史学研究所）		
調査参加員	大手前大学 人文科学部 大学院生および大学生 赤松和佳・橋本明子・小野美雪・北村美保・小見山依里・鈴木美穂・ 原真由美・藤井麻理子・堀内雅代・堀河鮎子・伊藤理恵・岩木友香・ 大里木綿子・古賀可奈子・斉藤史江・島田由美子・竹内志摩子・ 三枝容理子・北川裕貴・田中政之・山口勝頼		
作業従事者	近江町生涯現役センター	理事長	大久保勉
		事務局長	大林宗男
		事務局	土川孝司
	大林成義・小野政市・川崎晴夫・北居貞義・北川市次郎・沢村和子・ 鳶田忠則・庄司長栄・須藤正一・高居利彦・田中教一・田辺 勇・ 塚本新一・堤 正男・二國利和・西川孝雄・西川暢宥・浜田竹男・		

広瀬富子・増田義一・松居伸二郎・松岡政信・宮口敏夫・村岡 勉・  
山田収蔵・吉居康子・吉田左内・吉田廣栄・吉田康治

5. 本書をまとめるにあたって、下記の方々から指導、助言を得た。記して謝意を表する次第である。

赤塚次郎、宇野茂樹、江谷 寛、円城伸彦、大沼芳幸、小笠原好彦、奥田智子、大橋信弥、大林宗男、粕淵宏昭、桂田峰男、黒坂秀樹、北村 剛、木下秀行、近藤 滋、寿福 滋、田井中洋介、高居芳美、高橋克壽、高橋順之、田中勝弘、土井一行、中井 均、中川治美、中川通士、花田勝広、平等利男、広瀬繁明、古野四郎、細川修平、用田政晴。

(五十音順、敬称略)

6. 人塚山古墳の発掘調査に関しては、近江町はにわ館より多大なご援助をいただいた。職員の小北晶男・北川久志・谷口千夏の各氏には心より謝意を表する次第である。
7. 測量復原業務については、金城測量設計株式会社に委託して実施した。
8. 本書で使用した方位は、新平面直角座標系VIを基準としている。また標高はTP(東京湾平均海面高度)を用いた。
9. 本書で使用した写真は、主として遺構・遺物を森下が撮影し、調査状況を宮崎が担当した。
10. 本書の執筆は、森下章司、藤本史子、宮崎幹也が共同で担当し、宮崎が編集をおこなった。



近江町の位置

# 目 次

第1章	町内遺跡発掘調査事業の概要	1
第2章	人塚山古墳の調査・研究史	5
第3章	調査の結果	7
第4章	伝人塚山出土の須恵器	8
第5章	人塚山古墳調査のまとめ	11
第6章	息長古墳群を理解するために	12

# 挿 図 目 次

凡例挿図	近江町の位置	
第1図	人塚山古墳調査地位置図	2
第2図	人塚山古墳周辺測量図（1/500）	4
第3図	墳丘平面図・断面図（1/400）	6
第4図	伝人塚山出土須恵器実測図（1/3）	9
第5図	息長古墳群の主要古墳	12
第6図	定納5号墳平成14年度調査測量図（1/400）	14
第7図	定納5号墳：発掘調査前後の比較（1/400）	15

# 図 版 目 次

図版 1	(上) 人塚山全景（東から） (下) 伐採後の測量開始状況
図版 2	(上) 墳頂調査区（南東から） (下) 南調査区（南から）
図版 3	(左上) 東調査区（東から 拡張部） (右上) 北調査区（北西から） (左下) 東調査区（南東から 拡張部）

(右下) 南調査区 (南から)

- 図版 4 (上) 発掘風景 (近江町生涯現役センター)  
(下) 発掘風景 (大手前大学史学研究所)
- 図版 5 (上) 測量調査風景 (大手前大学史学研究所)  
(下) 遺物実測風景 (大手前大学史学研究所)
- 図版 6 伝人塚山出土須恵器



(1893年測量)



(1997年測量)

第1図 人塚山古墳調査地位置図

刀剣、須恵器がとりだされた。1994（平成6）年には京都大学文学部考古学研究室が墳丘周囲を調査した（京都大学考古学研究室1995）。全長46mに復原される前方後円墳で、北側くびれ部から大量の須恵器が出土し、墳丘周囲に石見型埴輪をふくむ円筒埴輪列がめぐることを確認した。豊富な副葬品をもつ前方後円墳として湖北地域でも屈指の古墳である。

人塚山古墳は、こうした息長古墳群の掉尾に位置づけられる前方後円墳として評価されてきた。この首長墓系譜の終末を知る上で重要な古墳であったが、過去の道路工事にもなって須恵器が出土していることが知られているだけで、古墳としての情報はほとんどなかった。

現在この塚の頂部には祠がもうけられ、また西裾に地蔵堂がある。この祠と地蔵堂の周辺では、毎年夏に近江町顔戸「松組」主催の地蔵盆がとりおこなわれている。これら祠や地蔵堂の背後は竹林や雑木でおおわれており、鬱蒼とした環境にある。古墳のある一体は、複数の地権者によって所有管理されており、長年にわたって間伐されない竹林の一部はゴミの不法投棄場所にもなっている。

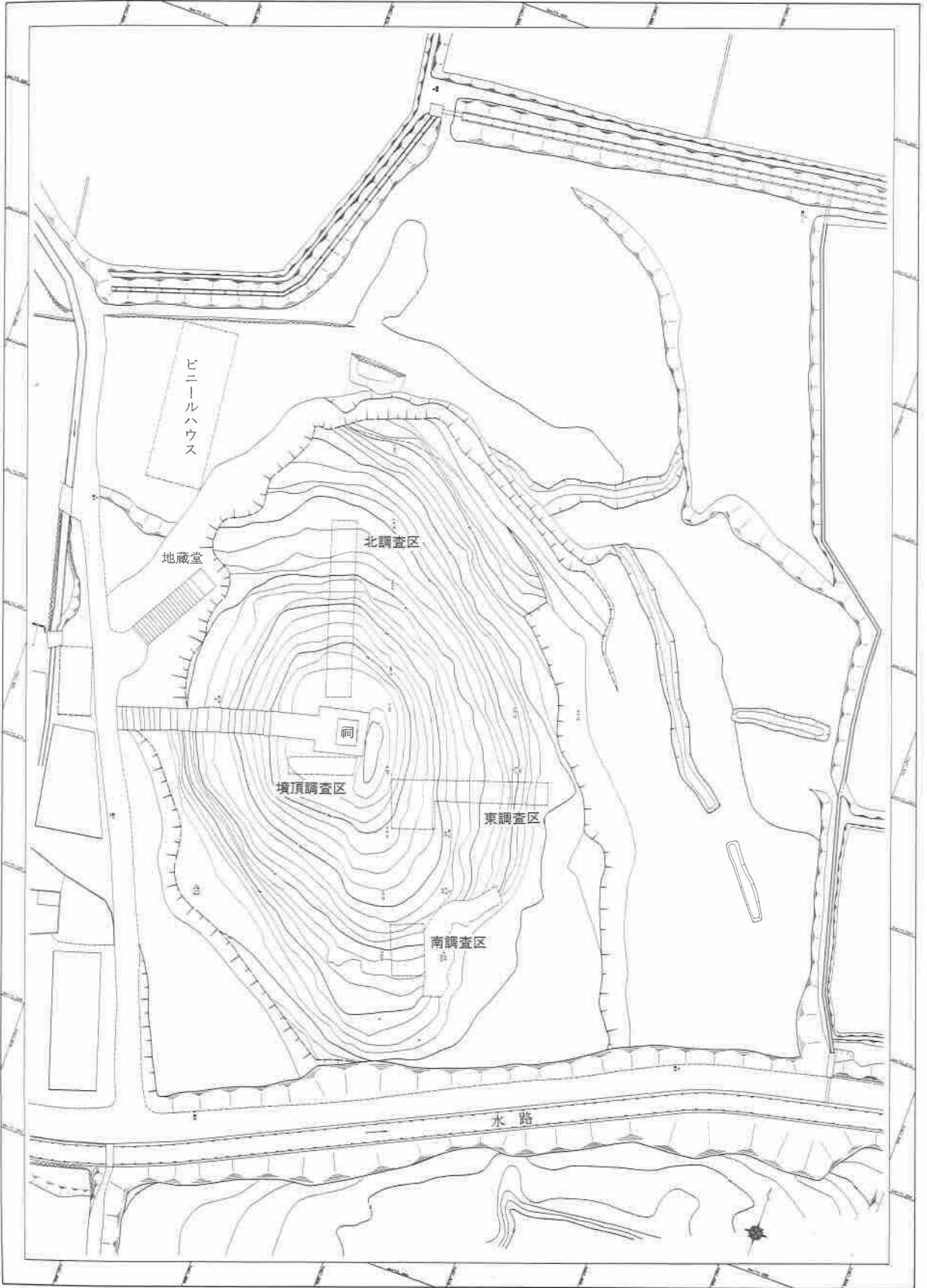
今回、近江町教育委員会では、息長古墳群の性格を明らかにする上で、最後の前方後円墳とされる人塚山古墳の実態解明を目的とした発掘調査を計画し、大手前大学史学研究所に古墳の基礎情報を収集するための発掘調査を依頼した。これを受けて同研究所では人文学部教授秋山進午、同櫃本誠一の指導のもと、森下章司、藤本史子、魚津知克の3名を主任調査員に任命し発掘調査が実施された。また、この調査の庶務は、近江町教育委員会の宮崎が勤めた。

現況調査から伐採作業、発掘調査、測量調査を経て、埋め戻し、境界復原に要した期間は、2001（平成13）年7月11日から2002（平成14）年3月29日まで。このうち2001（平成13）年8月20日から9月10日まで期間、大手前大学史学研究所が調査に従事した。

調査は夏場に竹林の一部を伐採したが、外部搬出した竹は粉碎され、近江町内の里山保全事業「やまの森」（近江町日光寺）の散策路に緩衝材として活用されている。伐採調査は8月中旬の「地蔵盆」期間のみ中断し、大学機関の測量調査・発掘調査によって再開した。

発掘調査は9月中旬に一端終了し、11月より残りの竹林を伐採して測量調査を再開した。晩秋に伐採した竹は外部搬出し、町内多和田の「まちづくり事業」の一環で「竹炭」「竹炭液」に再生されている。





第2図 人塚山古墳周辺測量図 (1/500)

## 第2章 人塚山古墳の調査・研究史

この塚は古くから古墳と認識されていた。人塚山古墳を古墳として最初に紹介したものは『近江國坂田郡志』であるが、この資料には1913（大正2）年に発行された旧版の『坂田郡志』（滋賀県坂田郡教育会編 1913）と、1941（昭和16）年に再発行された新版の『近江國坂田郡志』（辻善之助ほか 1941）が存在する。

まず旧版の『坂田郡志』では、下巻第11編墳塚墓志の章に「人塚山」の項目があり、次のように記述されている。

日撫村大字顔戸にあり。圓形の一丘なり。土俗人塚山といふ。又一説に後鳥羽上皇、名超寺御潜幸の當時、比丘より田植を御覽ありたりとて、鳥羽岡とも名くと、此丘状を見るに、正しく圓形の古墳なり、所謂人塚に相違なかるべし、

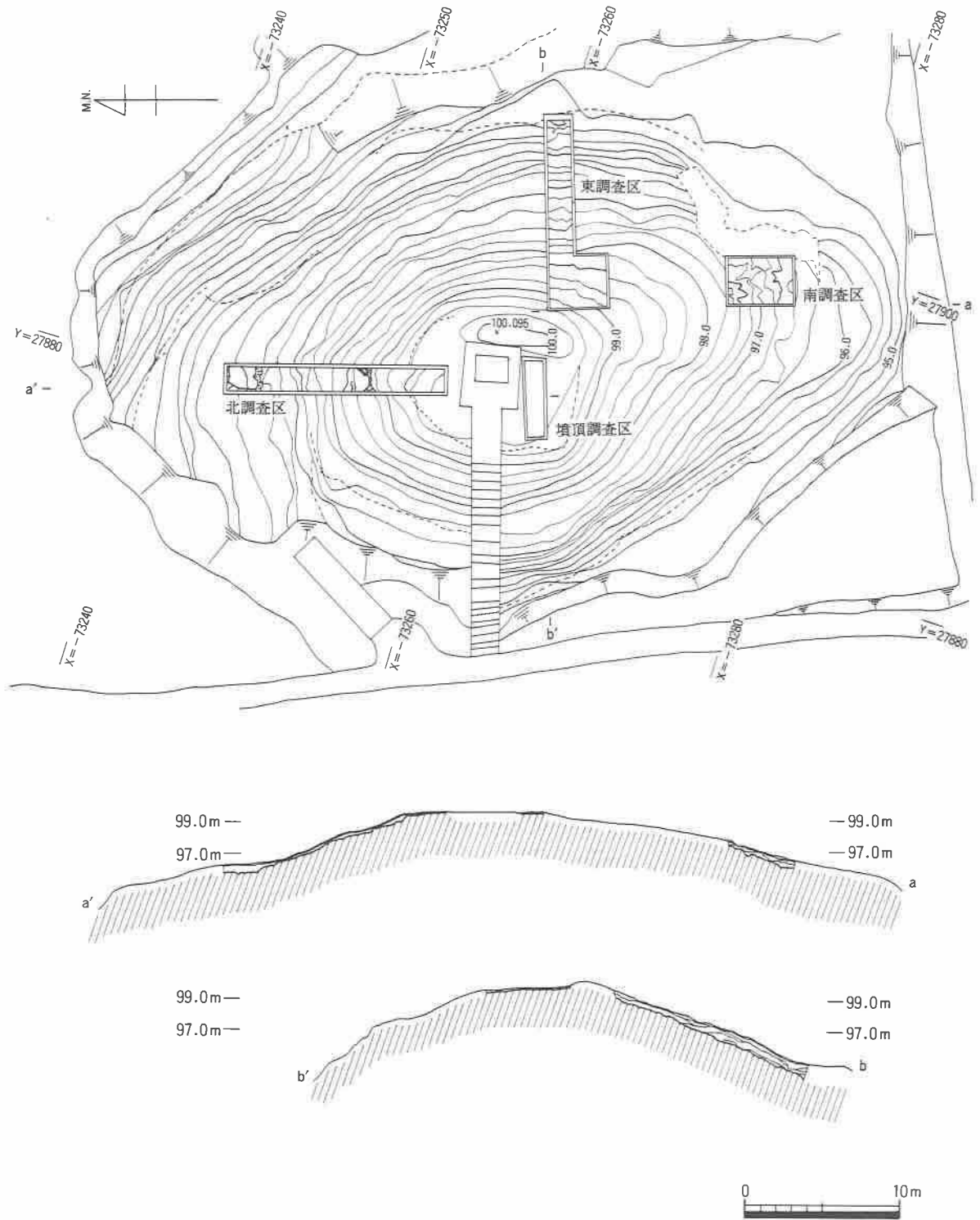
旧版の『坂田郡志』が発行される約30年前にあたる1882（明治15）年、同じ息長村では能登瀬の神社参道拡幅工事で山津照神社古墳の横穴式石室が不時発見され、内部の家形石棺から金銅製冠や銅鏡、馬具、鉄刀などが出土している。当時の内務省の通達によって山津照神社古墳の石室は直ちに埋め戻されたが、地元の息長村では、少なからずも古墳に対する幾分の知識が備わったことが予想される。こうした中で書きとめられた「人塚山」の記述は、当時の評価として冷静に受け止める必要がある。

これに対して28年後に発行された新版の『坂田郡志』では、第二編古墳・古塚志の章に「人塚山古墳」と項目が立てられ、次のように記述されている。

日撫村大字顔戸にあり。圓形の一丘なり。土俗人塚山といふ。又一説に「後鳥羽上皇、名超寺御潜幸の當時、比の丘より田植を御覽ありたりとて、鳥羽岡とも名づく」と。丘状を見るに、封土三段に築かれ、第一段の一部は畑なりしが、昭和七年二月山西街道改修工事中、地下五尺の箇所（日撫村大字舟崎田邊喜代吉氏所有地）より、祝部式平瓶一箇・埴一箇・蓋坏一箇・盤一箇・計四點出土し、遺品は全部顔戸の松居元治氏宅に所藏す。猶、古墳の第一段（残部）第二段は俱に竹林となり。第三段即ち、上段約一坪の地積に、小祠あり、地藏尊を祠る。按ずるに、人塚山古墳の後鳥羽上皇に関する傳説の根據に付き、詮索の文献無きも、古墳として相當古き部類に屬す。又、古墳の形式上より窺えば、圓墳の如くなるも、上古に於ては或は前方後圓墳なりしを永き星霜の中に前方部開墾整地され、後圓墳のみ残されしにはあらざる歟。古墳の三段階式なるは、中世後三段階に整理せしや確證無きも、古墳築造當時より段階を造る墳丘形式もあれば、果たして其の種類に屬せば古墳保存上注意すべきなり。

因に伊吹山大字上野に人塚あり。人塚に伏在する意義なきや。

旧版と新版を比較すると記述内容が増加していることがわかる。また新版では、以上のような解説に加えて土器の略図6点が付されており、これらの土器が人塚山の存在に注意をうなが



第3図 墳丘平面図・断面図 (1/400)

すきっかけとなったことがわかる。また後鳥羽上皇に関する伝説の存在も古墳という認識を高めたようだ。

その後、人塚山古墳は新しい事実がないまま古墳として登録されてきた。新版が発行された前年にあたる1940（昭和15）年には、京都帝国大学文学部考古学研究室が息長村能登瀬の山津照神社古墳に赴き、墳丘測量と遺物調査を実施しているが、その一連の作業の中で人塚山古墳の簡易測量が実施され、「前方部を消失した前方後円墳」と評価されたと、地元では記憶されているが、事実関係は不明である。

1987（昭和62）年には、55年前に出土した須恵器が再報告され（中川1987）、さらに『前方後円墳集成』近畿編でも、墳長51mの「前方後円墳（?）」として取り上げられ、10期の古墳として位置づけられている（用田ほか1992）。

### 第3章 調査の結果

今回の発掘にあたり、現地形の検討から後円部を北に向けた全長30mほどの前方後円墳の墳丘が想定できるとみて調査区の設定をおこなった。塚の北側斜面、墳頂部、東斜面、南斜面の計4箇所に調査区を設け、もっとも残りがよいとみられる北調査区から順次掘削を進めた。

**北調査区** 斜面の下に平坦面が形成されているが、調査を進めると浅いところでは地表下20cm、平坦面のところでは約40cm下から岩盤が露出した。岩盤の上には、近代を中心とした中世・近世の遺物を若干含む黒色土層が直接堆積している。斜面の中腹と平坦面への境界にはこの岩盤を掘り込んだ浅い溝がもうけられていたがその埋土も黒色土である。平坦面もこの岩盤を削りだして形成されたものであり、堆積土の状況からそうした造作がおこなわれたのは近代であると考えられた。なお表土から古墳時代の須恵器杯片が1点出土している。

**墳頂調査区** ほとんど堆積土もなく、表土をめくるとすぐに岩盤があらわれた。岩盤は水平に削られている。

**東調査区** 傾斜角約20度に削られた岩盤上に、大量の近代瓦・陶磁器類と若干の中近世をふくむ黒色土層が堆積している点では北調査区と同じであるが、堆積は斜面下部では厚く、数層に区分できる。現地形では標高97.5mの位置に平坦面があるが、これは北調査区の平坦面とは異なり、岩盤の削りだしによるのではなく、斜面の黒色土上にさらに盛土を置いて形成されたものである。この盛土はその状況からかなり新しい時期、近年に積まれたものとみている。この調査区でも古墳時代の須恵器片が2点出土している。

**南調査区** 黒色土層下から岩盤が露出するが、他の調査区とは異なり、岩盤上面の凹凸が著しい。また現地形が南に張り出す前方部状とみられた高まりは、この部分に頂部から流出した黒

色土層がやや厚く堆積していたことによるものと判断された。この調査区でも須恵器が1点出土している。

## 第4章 伝人塚山出土の須恵器

1932（昭和7）年に出土したと伝えられ『近江國坂田郡志』に掲載された須恵器について報告する。先にも触れたようにこれらの出土品の存在が人塚山古墳の評価において重要な役割を果たしてきた。種類は、杯蓋・杯身・平瓶・高杯各1点、壺2点の計6点である。第4図-1の杯蓋は口径15.3cm、器高は5.0cmを測る。外面は灰黒色、内面は青灰色を呈し、胎土には0.3～0.9cm程度の小礫を含む。口縁端部内面には段を有し、天井部外面には反時計廻りに回転ヘラ削りが施され、口縁部外面と内面には回転ナデが施される。

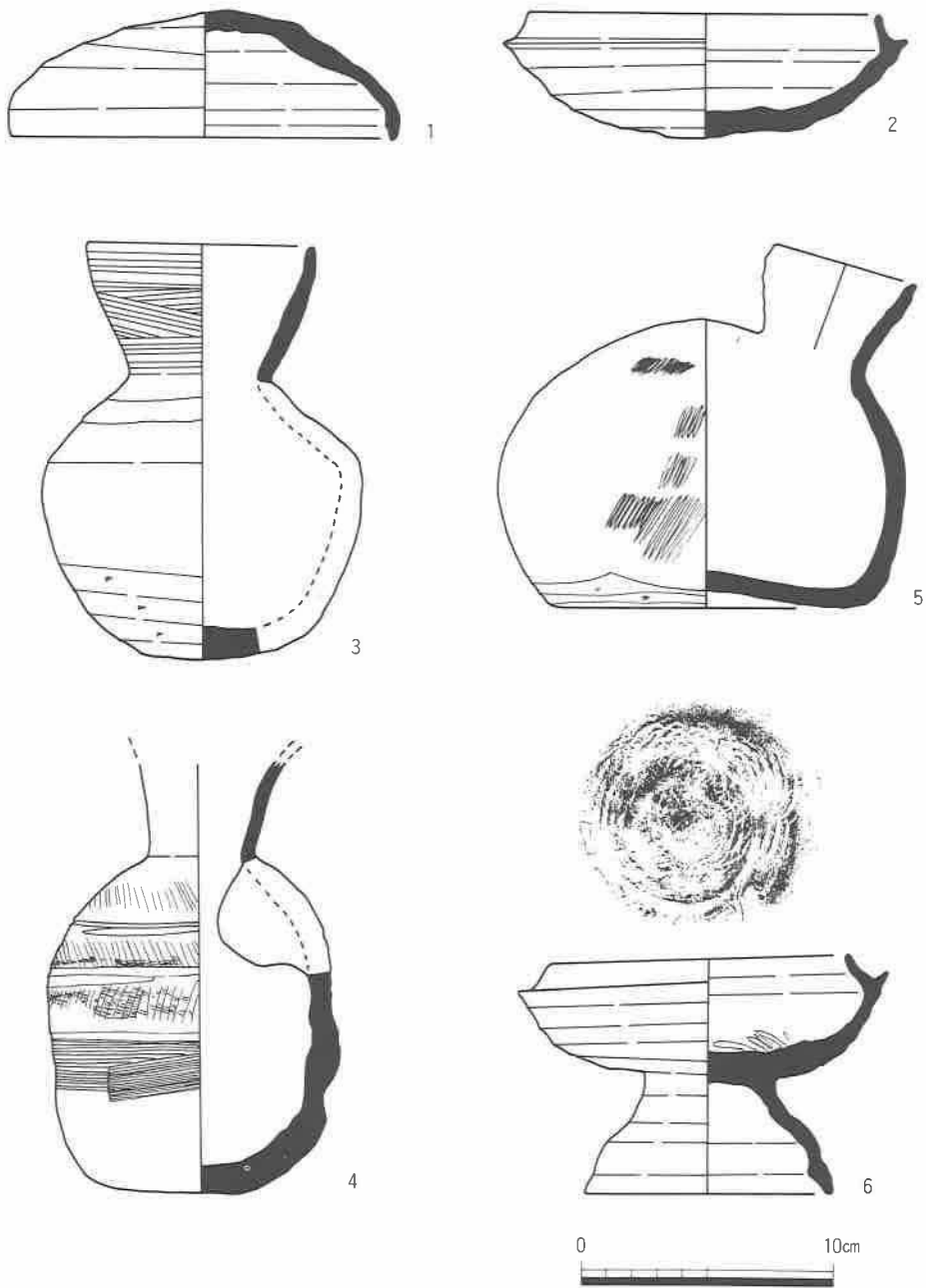
2の杯身は、口径13.8cm、器高4.9cmを測る。外面は灰黒色、内面は青灰色を呈し、胎土には0.3～0.5cm程度の小礫を含む。底部外面は、回転ヘラ削りが施され、口縁部外面から内面には回転ナデが施される。また底部外面には、底部切り離しの際の粘土塊が付着している。

3の壺は、口径8.8cm、器高16.6cmを測る。内外面とも暗灰色を呈し、白色砂粒を含む。口縁端部および内面には回転ナデが施され、口縁部外面には約5本単位で横方向の筋状の調整が施されるが、上下で単位の幅は異なる。軟質な原体を使用したと考えられる。外面肩部には粘土の継ぎ目痕が2段認められる。外面体部には回転ナデが、底部には反時計回りの回転ヘラ削りが施される。体部内面にはナデ調整が施されている。

4の壺は瓶形、平底を呈し、残存器高17.0cmを測る。内外面とも暗灰色を呈し、胎土には0.1～1.0cm位の礫を含む。口縁部には回転ナデが施され、体部外面には右下がりの櫛描列点文が2段、その下には左下がりの櫛描列点文が1段、さらにその下に15本単位の横方向の刷毛目が施される。また、各文様間には浅いヘラ描き沈線文が3段巡る。1段目と2段目の沈線は端部が確認されるが、1段目は反時計回り、2段目は時計回りに巡る。最下段の刷毛目は反時計回りに巡る。内部には焼成時に生じたと思われる気泡状の膨らみ認められ、器形全体が大きく歪む。

5の平瓶は、口径5.8cm、器高14.5cmを測る。内外面とも暗灰色を呈するが、口縁部外面と体部下半から底部にかけて、黒色物が塗布された痕跡が見られる。口縁部は回転ナデが施され、外面背部から体部にかけては、器表面の剝離が著しく、調整は明確にし得ないが、一部6本単位の平行叩きが4段残る。体部外面下半には横方向のヘラ削りが施され、底部外面には粗いヘラ削りが施される。体部から底部にかけての内面にはナデが施される。

6の有蓋高杯は、口径11.7cm・器高17.0cmを測る。内外面とも黒灰色を呈し、胎土には0.3～0.4cmの小礫を含む。杯部は、内傾する立ちあがり部と上方へつまみだされる受部をもつ。脚部は、



第4図 伝人塚山出土須恵器実測図 (1/3)

先端部が「く」の字状に屈曲し、中央部で外側へやや膨らむ。杯部は外面とも口縁部から体部下半にかけて回転ナデが施され、底部外面には回転ヘラ削りが施される。また、底部内面には同心円叩き痕が残る。これは杯部成形時の当て具痕と考えられる。

以上の特徴から蓋杯は6世紀後半の年代が考えられ、その他は6世紀末～7世紀前半の年代が与えられる。この中で特記すべきものは、壺である。3の壺には、外面口縁部に施された、単位が明確な筋状の調整痕と、肩部に残る粘土紐の継ぎ目痕が認められる。これらは須恵器壺に用いられる技法として特殊である。また4の瓶形の壺も、特殊な形態を呈する。この形態の

壺に関しては、近江・若狭地域、三重県安濃周辺などで、類例が確認されており、百濟系土器として渡来系氏族との関係が指摘されている(近藤1998)。しかしこのタイプの瓶形土器に関しては、外面に文様の施されないものが多く、4のタイプとは微妙に異なる。また、この瓶形壺に関しては、法隆寺境内防災工事に伴う発掘調査においても類例が認められる(法隆寺委員会1982)。この壺は4と比べると頸部がやや短く、外面胴部に3条の沈線が巡り、その間に櫛歯波状文が施される。形態とともに文様構成も類似している。法隆寺出土の瓶形土器は7世紀前半に比定されている。これらの須恵器はほとんど欠損が無く、珍しい器形がみられ、調整も特殊なものを含む。

## 第5章 人塚山古墳調査のまとめ

人塚山古墳の発掘調査では、いずれの調査区でも地表面からあまり深くないところで岩盤が露出した。西側斜面でも現状で各所に岩盤の露出がみられ、今日みる塚の形はほぼ岩盤を削りだして形成された形のままのものである。この岩盤は顔戸山から尾根上にのびる岩脈の一部とみられる。その上には近代の陶磁器類の包含層しかみられず、そうした塚が造作された時期は基本的に近代と判断される。また、塚丘状の高まりや裾とみられた地形がいずれも近代以降の廃土で形成されたものであることが確認された。

以上の調査結果から、この塚を前方後円墳に復元できる材料はほとんどなくなったと結論づける。

この知見は、息長古墳群や近江の後期古墳時代のこれまでの評価に影響を及ぼすものである。息長古墳群中で現在知られる「最後の前方後円墳」は山津照神社古墳となる。すなわち6世紀前半には前方後円墳の系譜が途絶えたことになり、また豊富な副葬品を有しもっとも有力な前方後円墳を最後として首長墓系譜に大きな変動が生じたことを示している。山津照神社古墳とよく対比される高島町鴨稻荷山古墳も同時期の古墳であるが、後続する首長墓墳はみあたらない。野洲町大岩山古墳群のようにやくに首長墓が円墳となった地域もある。いずれにしても近江では6世紀後半以降の可能性がある前方後円墳は非常に少ない。前方後円墳終末期の地域差がどのような背景によるものか、系譜を考慮しながら検討していく必要がある。

また一方で、人塚山が前方後円墳でないにしても、頂部をのぞく各調査区で須恵器片が出土していることにも留意したい。また以前に出土した須恵器の一群も、本稿で紹介したように特殊な製品を含む問題ある資料ではあるが、古墳の副葬品と一部関連する可能性はある。その出土伝承地点はこの塚の南を横切る道路付近であり、この塚の上あるいは周囲に後期古墳が存在したことを窺わせるものである。

近世以降のこの塚に加えられた造作は著しいものがある。『近江國坂田郡志』によって墳丘の段ともみられた平坦面や斜面も岩盤のおおがかりな整形によって作りだされたものと判明した。ところが頂部の平坦面は狭く、大きな建築物をもうける空間はない。砦や屋敷地にとまなう造成とみるには無理がある。岩盤の上を覆う黒色土には近世・近代の陶磁器・瓦類が多量にふくまれており、生活址にとまなう廃土と考えられる。しかし、この頂部にもうけられた住居からもたらされたものとみるとあまりに多量であり、他所から運ばれた可能性が高い。何を目的としてそのように土砂を移動し、一部に形づくってこの「塚」をつくりあげたのか、はっきりした答えはつかめていない。しかし、この塚にまつわる後鳥羽上皇に関連した伝説、周辺の古墳の存在、また地藏信仰などがあいまってこの塚全体を故あるものとみなし、なんらかの造作が加えられた可能性が考えられる。

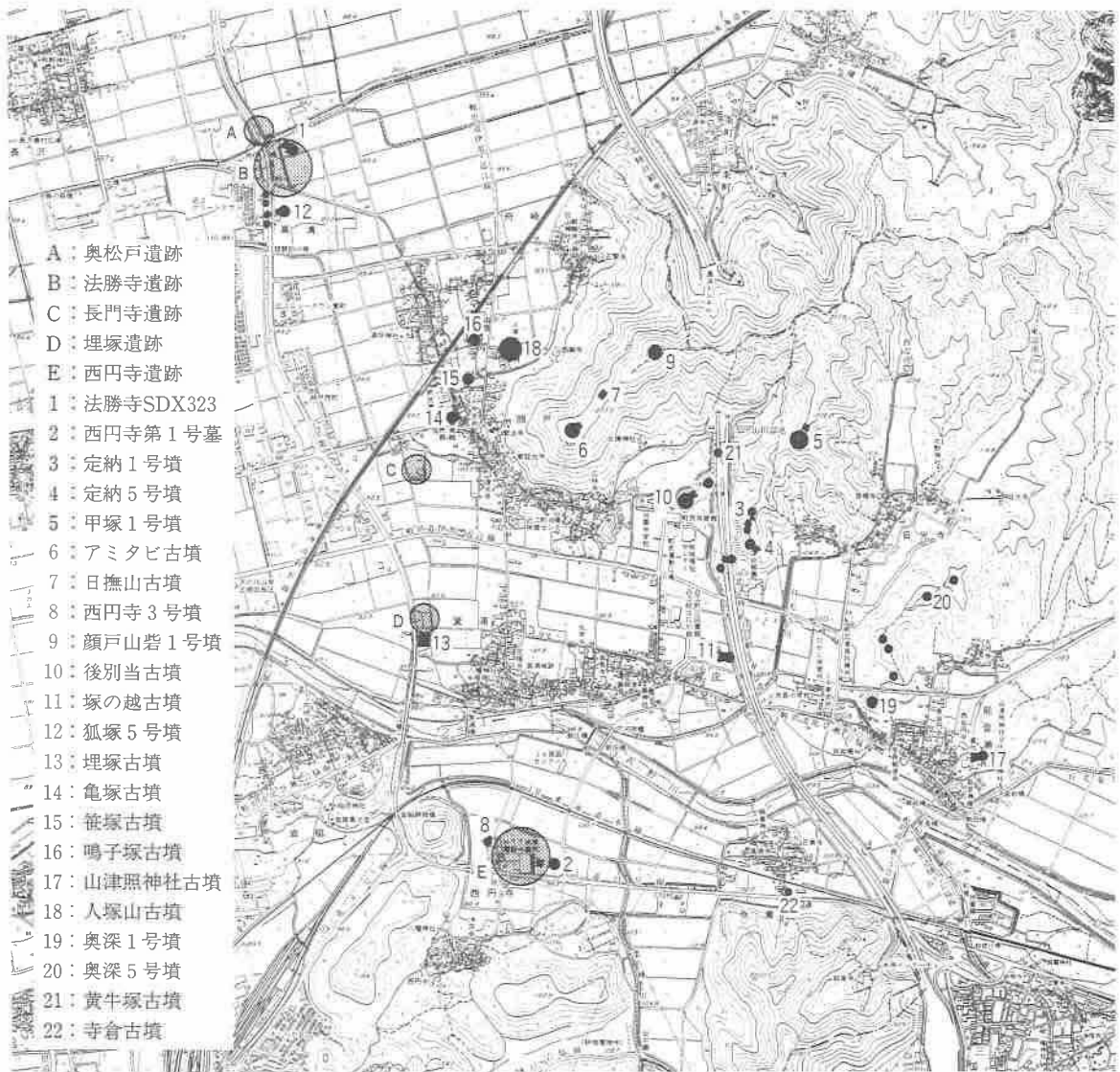


## 第6章 息長古墳群を理解するために

今回の人塚山古墳の発掘調査では、この塚が後期の前方後円墳ではなく、近代以降の廃土で構築された「塚」であることが明らかとなった。これによって従来より使用されてきた「人塚山古墳」といった名称には問題が生じ、今後は「人塚山」として扱うこととなる。

「塚」である人塚山が築造された年代については、出土遺物の年代観から明治初頭の1868年以降、旧版の『坂田郡志』が刊行された1913年までの約45年間のものとして推測される。

この時期に息長村地域では、山津照神社古墳の発見（1882年）というセンセーショナルな出来事がおこり、古墳の被葬者を息長氏とするとともに、「当地域は古代豪族息長氏の本貫地である」という意識が地域内にもたらされた時期である。



第5図 息長古墳群の主要古墳

今回の調査によって、息長古墳群中「最後の前方後円墳」と評価されるものは近江町能登瀬に所在する山津照神社古墳であることが明らかとなった。6世紀前半、豊富な副葬品を有しもっとも有力な前方後円墳を最後として首長墓系譜に大きな変動が生じたことが明らかとなったのである。

この山津照神社古墳については、1882(明治15)年の調査から112年後に京都大学文学部考古学研究室によって古墳の測量調査が実施され、県史跡指定範囲外の裾部に調査のメスが加えられた。この調査では、新知見も多くみられているが、その1つは古墳裾部に石見型埴輪の巡る事実が明らかにされたことである。これは同じ息長古墳群内で先行する塚の越古墳に共通する事象であり、現在のところ近江国内で2基のみに限定した事例である。かつては盾形埴輪の代表格であった石見型埴輪も、近年の調査研究では「威儀具」としての理解が高まっている。滋賀県内では、石見型木製品の出土が湖南地域に認められるものの、石見型埴輪の出土は当地域の6世紀前半代に限定されている。

また山津照神社古墳のくびれ部では造り出し状の平地の存在が確認されている。ここでは、脚を持つ器種・大形の器種を主体とした須恵器が大量出土しており、祭礼事象が推測されるが、全体規模の把握がされておらず、今後の調査によって明らかになることが期待される。

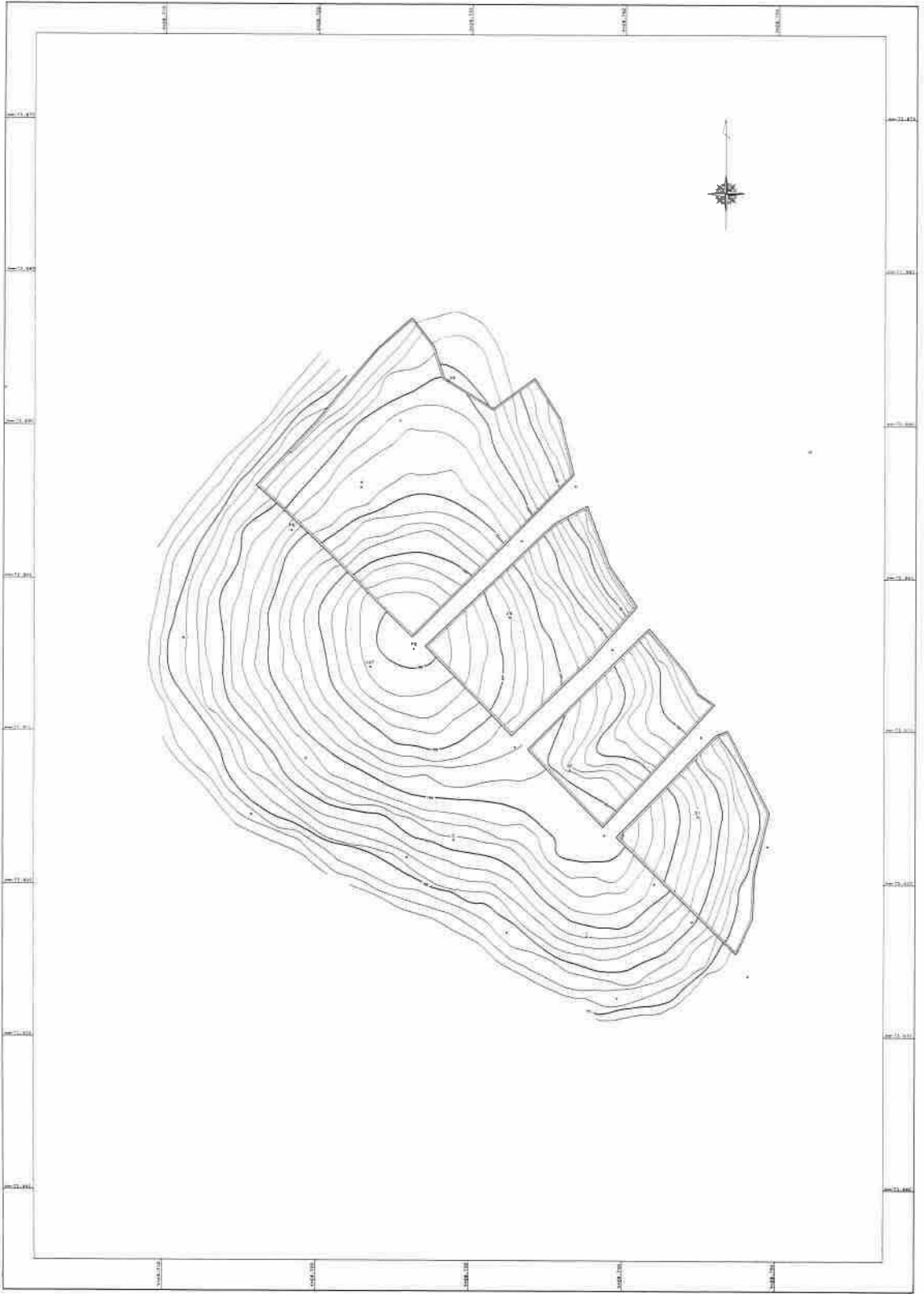
息長古墳群については、最後の首長墓が限定された点に今回の調査意義が生まれるが、では全体として、どのように理解されるようになったのか再整理してみたい。

まず前代の弥生時代の構造から復原すると、紀元前1世紀に相当する弥生時代中期後葉には、現在の一般国道8号(長浜バイパス)と一級河川「土川」との交点付近に、集落域と墓域を完成させたことが知られている。ここでは北部に集落域(長沢遺跡・奥松戸遺跡)、南部に墓域(法勝寺遺跡・狐塚遺跡)が構築され、特に方形周溝墓群で構成される墓域の実態が明らかにされている。

集落域は湖側に西隣する中期初頭の集落(碓遺跡)から上流域に移動したことが予測され、近年碓遺跡の調査では「縄文晩期の突帯文土器」「前期の遠賀川式土器」「東海地域の条痕文土器」「中期前半の簡描文土器」の4種が混在した地域の土器様相が明らかになっている。長沢遺跡・奥松戸遺跡では、調査情報が制約されており、集落全体の復原を試みるには時間が要するが、法勝寺遺跡・狐塚遺跡の墓域については、法勝寺遺跡で9次調査が、狐塚遺跡で4次調査が実施されている。検出された墓関連遺構については調査次数を頭につけ3ケタ表示で再整理されている(例:第3次調査で検出された23号墳墓は「SDX323」と再登録されている)。

これら中期後葉の墓域は、後期前半の西暦1世紀前半代に一端、埋没して姿を隠す傾向にある。この傾向は滋賀県下全域に認められ、大津市大伴遺跡・守山市服部遺跡・同下之郷遺跡・彦根市馬場遺跡などの消失時期にあたるほか、近江八幡市蛇塚遺跡・浅小井遺跡・近江町法勝寺遺跡では弥生時代後期の遺構との重層関係が確認されている。

特に法勝寺遺跡では、中期後葉の墓域上に後期中葉以降の墓域が再構築され、大形方形周溝

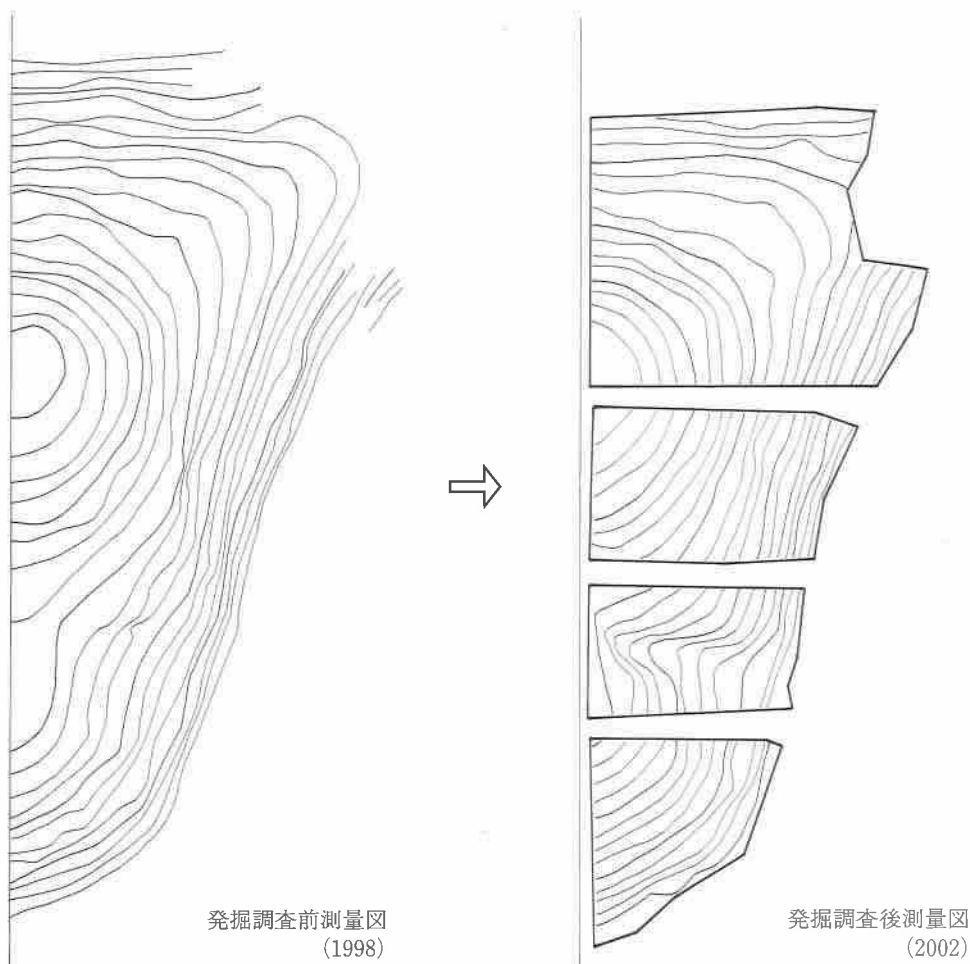


第 6 図 定納 5 号墳平成14年度調査測量図 (1/400)

墓や前方後方形周溝墓を核とした小群構成墳墓の密集する様相が明らかにされている。こうした方形周溝墓の配置では溝や沼沢地を取り込んだ構造が顕著で、水辺における葬制の復原が今後期待される。

3世紀代になると法勝寺遺跡の南方に大規模な溝の掘削と集落の再編成がなされ、黒田遺跡・高溝遺跡では「水辺祭祀」に関連した遺構も発掘されている。この時期の墳墓としては、西円寺第1号墓（円形低墳丘墓）の出現が特徴的で、円墳墓の採用が天野川流域で認められたことになる。

またこれに続く4世紀代の墳墓として、これまで横山丘陵南端尾根上の定納古墳を想定していた。定納古墳は1号墳～7号墳の全7基で構成され、これまで4世紀代のものとして推測されてきた（用田・細川1992）。このうち6号墳（前方後円墳）と7号墳（円墳）は、北陸自動車道の建設によって未調査のまま消失している。また定納古墳群測量調査団（魚津知克・村木二郎・岩田貴之ほか）の測量調査によって定納1号墳と5号墳が前方後円墳として理解されるにいたった（定納古墳群測量調査団1998）。



第7図 定納5号墳：発掘調査前後の比較（1/400）

近江町教育委員会と大手前大学史学研究所では、2002（平成14）年度に古墳の半分を発掘調査し、本来の墳丘が「前方後方墳」であることを明らかにした。詳細な調査は2003（平成15）年以降に持ち越されているが、丘陵上に構築された前方後方墳では、くびれ部分に多量の土砂が流入し、前方後円墳の形状に堆積していく事実も判明している。

また、この時期の注目される遺物として山津照神社所蔵の「内行花文鏡」があげられる。

現在、山津照神社古墳の出土遺物として混同されている資料の「内行花文鏡」は、明治15年の発見資料に一括されたものである。古墳発見の経緯を記した同神社所蔵の『古墳ニ関スル書類』を見ると、銅鏡（内行花文鏡）1面、鉄剣、鉄塊が「西ノ方岡山土中」より発見されたことが知られ、前期古墳存在の可能性が示唆される。これに該当する古墳は、奥深1号墳、定納5号墳、あるいは未発見の古墳などが対象となる。今後は、銅鏡の成分比の調査など科学的な調査によって明らかにされることが待たれる。

続く5世紀代については、甲塚1号墳の詳細調査実施によるまで明らかにすることはできない。同古墳の調査は、平成17年度から調査を予定しており、古墳時代中期の地域首長墓の実態が明らかにされることが望まれる。また昨年報告した奥深5号墳は岩盤を削り貫いて墓壇を構築した楕円形墳であり、出土した須恵器から5世紀代のものとして判断しているが、近世末期に受けた盗掘が激しく、実態を明らかにすることはできなかった（宮崎2002）。

さらに後期古墳としては、塚の越古墳と狐塚5号墳が知られる。6世紀初頭の構築である塚の越古墳は、平成元年度の調査によって葺石と周濠の存在が確認されているものの、大半覆土を消失しており構造には不明な点が多い。この古墳では想定される石室位置を再調査することで、地下遺構から石室構造を迫することも可能と考えている。近江湖北地域における横穴式石室導入時期を決定する上で重要な課題と考える。

また高溝の狐塚5号墳は、豊富な形象埴輪を出土する帆立貝形古墳として周知される。周囲に存在する4基の古墳は、いずれも僅かな造り出しをもつ小形の円墳であり、この形状は西円寺第3号墳より続く当地域の小形古墳の特徴として理解される。狐塚5号墳と塚の越古墳の時期差は、これまでの見解と異なり、現在ではともに6世紀初頭で並列すると解釈している。

これまで墳形の明瞭な古墳に対しては、埋蔵文化財の保護調整がなされてきたが、その反面、調査のメスが入る機会が少なかったのが現状である。このため、古墳については、発掘調査することなく測量調査のみによって古墳の墳形を明らかにしている基礎データが多い。人塚山古墳や定納5号墳の調査では、発掘調査によって古墳の性格・規模・特徴を明らかにすることができた。同様に、保護すべき古墳本来のデータを得る発掘調査も今後は増加して必要があろう。

近江町では、国庫補助町内遺跡発掘調査事業の中で、行政機関と大学機関の学社融合による息長古墳群の調査を今後も継続していく。地域の埋蔵文化財に正確な評価を下し、活用できる文化遺産の整備をめざしたいと考えている。

末筆になったが、息長古墳群の調査に際して、ご協力をいただいた関係者と諸機関に謝意を

表する次第である。

- 京都大学文学部考古学研究室 1995『琵琶湖周辺の6世紀を探る』平成6年度科学研究費補助金一般  
研究B調査研究成果報告書
- 近藤 広 1998「近江高島郡における渡来系文化」(『滋賀考古』第20号、滋賀考古学研究会)
- 滋賀県坂田郡教育会編 1913『近江國坂田郡志』第1巻、坂田郡役所
- 島田貞彦 1925「近江国坂田郡能登瀬の古墳」(『歴史と地理』15-3)
- 定納古墳群測量調査団(魚津知克・村木二郎・岩田貴之ほか) 1998「近江町定納古墳群測量調査報告」  
(『滋賀考古』第20号、滋賀考古学研究会)
- 辻善之助ほか 1941『改訂近江国坂田郡志』1
- 中川通士 1987『近江町内遺跡分布調査報告書』近江町文化財調査報告書1、近江町教育委員会
- 法隆寺発掘調査概報編集小委員会 1982『法隆寺発掘調査概報』1
- 宮崎幹也 1990『法勝寺遺跡』近江町文化財調査報告書第6集、近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1991『塚の越古墳』近江町文化財調査報告書第10集、近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1993『西円寺遺跡』近江町文化財調査報告書第16集、近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1995『近江町埋蔵文化財調査集報1』近江町文化財調査報告書第18集、近江町教育委員会
- 宮崎幹也 1996『近江町埋蔵文化財調査集報2 一狐塚遺跡発掘調査報告書一』近江町文化財調査報  
告書第19集、近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2000『息長古墳群1』近江町文化財調査報告書第20集、近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2001『近江町埋蔵文化財調査集報3』近江町文化財調査報告書第21集、近江町教育委員会
- 宮崎幹也 2001「県史跡山津照神社古墳」(『滋賀文化財教室シリーズ』197 滋賀県文化財保護協会)
- 宮崎幹也 2002『息長古墳群2』近江町文化財調査報告書第23集、近江町教育委員会
- 森下章司・藤本史子ほか 2002『大手前大学史学研究所紀要』第1号、大手前大学史学研究所
- 用田政晴・細川修平 1992「近江」(近藤義郎編『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社)

## 報告書抄録

ふりがな	おきなごふんぐん							
書名	息長古墳群 3							
副書名	人塚山古墳発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	近江町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編集著者	森下章司・藤本史子・宮崎幹也							
編集機関	近江町教育委員会							
所在地	〒521-0072 滋賀県坂田郡近江町顔戸488-3 ☎0749-52-3111							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ひとつかやま 人塚山 古墳	しがけん 滋賀県 さかたぐん 坂田郡 おうみちよう 近江町 ごうど 顔戸	254649		35° 20' 15"	136° 18' 30"	20010711 ～ 20020329	300m <sup>2</sup>	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
人塚山古墳	(古墳)	古墳時代 近代		塚		須恵器	前方後円墳ではない	

# 版 圖





人塚山全景（東から）



伐採後の測量開始状況



墳頂調査区（南東から）



南調査区（南から）



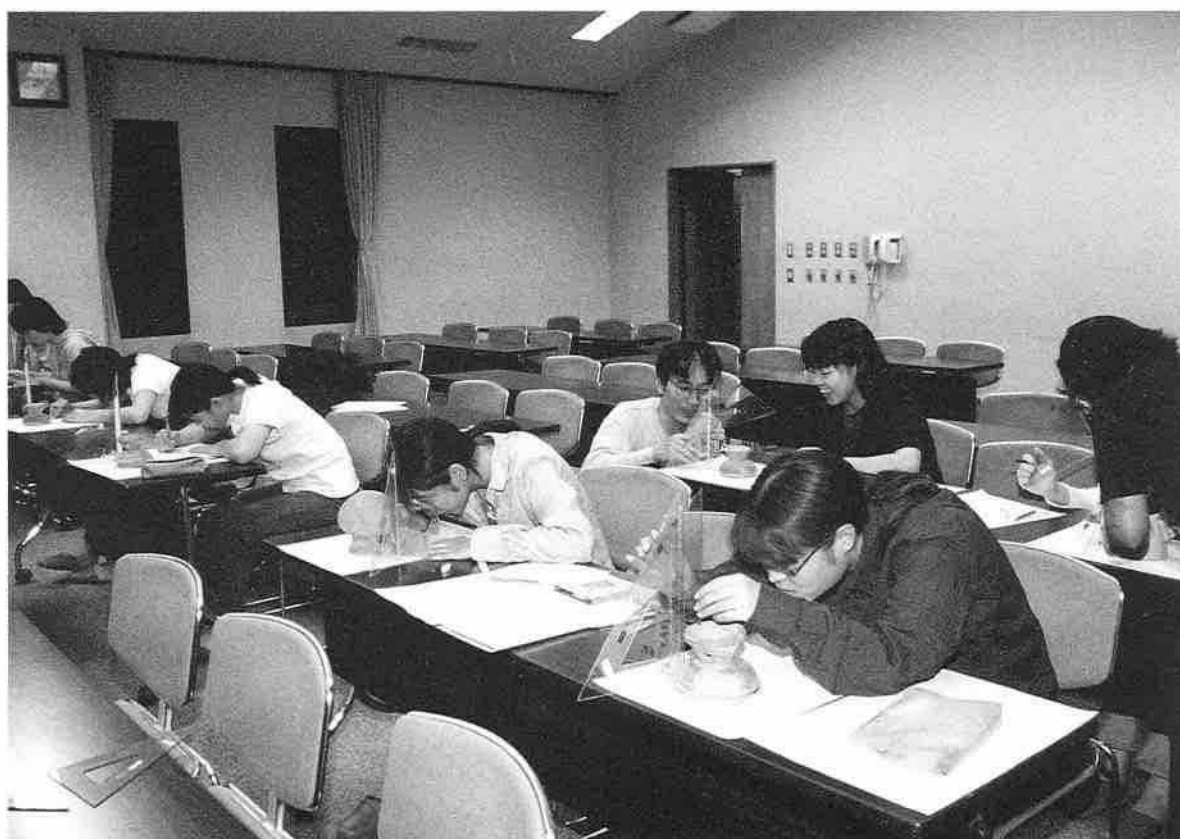
発掘風景（近江町生涯現役センター）



発掘風景（大手前大学史学研究所）



測量調査風景（大手前大学史学研究所）



遺物実測風景（大手前大学史学研究所）



1



2



5



6



4



3

伝人塚山出土須恵器

近江町文化財調査報告書第24集

息長古墳群 3

—人塚山古墳発掘調査報告書—

2003年 3月

編集・発行 近江町教育委員会

〒521-0072 滋賀県坂田郡近江町顔戸488-3

☎0749-52-3111

印刷 有限会社 真陽社